

エピローグ

(おわりに)

Cynthia Board Schmeiser

(アメリカン・カレッジ・テストイング：ACT)

この「テスト作成ハンドブック」を読み終わって感嘆させられることは、この40年間、特に最近の20年間にテスト開発が見せた顕著な発展ぶりである。このハンドブックで驚くほどはっきりしていることは、40年前には主に意見や直感を基に考えられていた1つの専門領域が、より科学的なアプローチを携えて成し遂げた大きな歩みを示していることである。実際家にとって実質的に推奨できるものは、忠告とか意見の形で歴史的に言われてきたテスト作りの慣習法を伝えることよりも、実際に行われてきた研究の実質的成果を伝えることである。DowningとHaladynaによると、このハンドブックの目的は次のようであると言う。

…知識、技能、能力のテストを作成する上で、体系的で包括的な情報源となり、このハンドブックが21世紀に入ってからのテスト開発の現況を伝えることである。

私の意見では、このハンドブックはこの目的を達しただけでなく、それ以上のものを示している。このハンドブックは、テスト作成の進歩の中で考えられる主なものを包括的に述べるだけではない。ここには、テストテクノロジーの応用と共に生まれた、テスト作成の新しい議論が含まれている。それは、テストの作成過程を支援するだけでなく（例：コンピュータテスト）、同時にそれに反する側面（例：テストの機密性に違反するテクノロジーの使用）も共に扱っていることである。いっそう大事なことは、この「ハンドブック」の執筆者たちはすべて、健全なテスト作成の実際に役立つよりどころとして、『教育・心理検査法のスタンダード』の章の内容に基づいて執筆していることである。

このハンドブックはテスト作成の実際の現況を包括的に要約しようとしているが、ほとんどどの章でもそれは現在の状況を超えて、未来への意味を暗示しながら行っている。我々に作ってくれたそうした章のいくつかの見解の中には、そう思わずにはいられないものがある。このハンドブックから呼び起こされた夢と希望を、私も共に分かち持ちたいと思っている。

この20年間、教育における規準をベースとする改革運動は、カリキュラム、授業、評価に、ものすごい大きなインパクトを与えてきた。評価の目的でなされるアセスメント結果の利用は成長して、立法化されるまでになった。学力や技能の成長と進歩への期待は、いまや当たり前のことである。しかし、この説明責任と進歩への期待の背景について私が案ずるのは、テスト開発が持つ本当の意味であり、近い将来、その期待がテストに課せられるようになってくるであろうことである。

我々はみな、本当の教育改革がテストだけで成されるものではないことをよく知っている。今日なされる大規模テストは説明責任のために、現在の学力の状態と時系列的な進歩を測る目的でなされている。しかし、テスト作成の専門家として言うならば、テストデザインの基本的要素として、その焦点が直接教授に結び付いたテストデザインにもっと向けられる必要がある。それらは学生の知識、技能、能力についてのより詳しい情報だけでなく、実際に経験的に支持されている授業を受けることに

よって、その成果が結果に示されることが大事である。そのことをするために、現在の方法論は、私の意見ではまだぎこちない段階である。しかし、このハンドブックで要約されていることを基礎に、それを可能にする手段と方法が得られるかもしれない。

それには新しいアイデアが必要か。そうではない。診断的テストは長い間、我々専門家の間で試みられてきたが、まだテスト作成の実際面では、大きな進歩があるとは言えない。それには、テストデザインの初期段階から授業の流れに従ってうまく配列された、より動的な実用的評価法が進歩する必要がある。そこで必要なテストデザインは、適切な観察記録として、次に続く教授ステップに直接つながるきれいな連続情報が報告される形のものである。それは、教育における現在の議論の文脈の中で、テスト開発者がテスト作成の科学的な応用としてもっと考えなくてはならないものであろう。それはできていると思っている。

テストによって教授の成果を評価し、その結果を教授法の改善に役立てようと望むのと同じように、テストデザインでなされる決定の評価にも気をつけたいという要求がますます増えてきている。それに応えて、テストと項目プールのデザインとその改善にもこの情報を利用すべきである。例えば、コンピュータ適応型テストプールでの問題項目の使用パターンを分析することで、問題選出はうまくなされていたか、問題提示アルゴリズムはよかったかといった評価にも使え、それがテストデザインの青写真とも比較されて、問題作成の次回ラウンドへの情報となる。同様に、あるタイプの課題を評価するのに、特定の問題形式を使うことは、それが何を測定しているのか、また、いかにうまく測定しているのかを評価して効果が試され、テストの青写真で伝えようとしているものと照らし合わせて、それを使うべきか否かを評価しなければならない。テストデザインと問題作成の中でなされるすべての決定において、意図する目的とテスト結果の利用が最終的に一貫性を持つようにするためには、その決定がルーチン的に評価されるようにしなければならない。

この「テスト作成ハンドブック」は、問題作りのテクノロジーに深く焦点が当てられているわけではないが、私は一言注意を述べておきたい。過去10年あまりの間に、問題の自動作成のテクノロジーには大きな進歩が見られた。しかし、大事なことは、教育者—実践者の心から生まれたテスト問題の創造的なアイデアからくるテスト作成の技を、犠牲にはならないということである。その人たちは毎日の教育実践に打ち込み、そのプロセスの中から問題を生成してきたが、テクノロジーが使われるようになると、その効率を求めるテスト作成者が自然に増えてくる。我々は、こうした一番経験の深い教育者の間から生まれる芸術的な創造性と問題作りの科学との間に、適切なバランスを見つけることが必要である。

それと同時に、我々はテスト作成の実用を目指す専門家として、高度な倫理規準を維持する必要性の眼を失ってはいけない。ますます、そして日々テスト作成の需要が高まってくると、我々すべてに倫理的原理を求める議論が大きくなっていくに違いない。我々が直接そのような圧力に対して発言することは、このハンドブックが意図した範囲のものではないが、我々の持つ技術と共に、そうした行動の中に専門家としての最高度の規準を維持しようとする眼を失ってはならない。

これらすべてを考えても、我々みんなに価値のある情報源として、このハンドブックは疑いもなく役に立つものであると言ってよい。それは、我々のような専門職に入るための勉強をしようとする人だけでなく、日常の基礎として、テスト作成の実務に携わる人にも役立つものである。そしてさらに新たに、我々が対象として扱う人々に対して何をなすべきか、つまり、そのテスト結果を基に我々が推測しなければならない人—受験者—について考え、それに対して成し得る一層の努力をしなければならない。この結果を受け取った受験者が次に何をすべきか、どのような指針を与えるかなどについて、我々の到達目標として考える努力を続けなければならない。知識や技能や能力の中で弱いとこ

ろを強めるのか、あるいは、次のレベルに到達するように拍車をかけ続けるのか、我々テスト作成者がテスト作成の実務をより容易にすることだけを考えて、我々の奉仕する受験者の権利を犠牲にするようなことがあってはならない。

陳腐な言い方だが、しかし、真なる言葉として捧げたい。この「テスト作成ハンドブック」は、それを書いた人たちのすばらしい仕事の成果として完成し実現した。しかし、まだ残された仕事は大きい。